# 慈しみは国境を超えて
## ～グローバル時代をどう共に生きるか～

浜　矩 子

奨励者紹介〔はま・のりこ〕
同志社大学ビジネス研究科教授
〔研究テーマ〕グローバル経済と通貨・金融問題

主の慈しみは決して絶えない。
主の憐れみは決して尽きない。
それは朝ごとに新たになる。
「あなたの真実はそれほど深い。
主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い
　わたしは主を待ち望む。

主に望みをおき尋ね求める魂に
　主は幸いをお与えになる。
主の救いを黙して待てば、幸いを得る。
若いときに軛を負った人は、幸いを得る。

軛を負わされたなら
黙して、独り座っているがよい。
塵に口をつけよ、望みが見いだせるかもしれない。
打つ者に頬を向けよ
十分に懲らしめを味わえ。

主は、決して
　あなたをいつまでも捨て置かれはしない。
主の慈しみは深く
懲らしめても、また憐れんでくださる。
人の子らを苦しめ悩ますことがあっても
それが御心なのではない。

この地の捕らわれ人をだれかれなく
　足の下に踏みにじったり
いと高き神の御前をもはばからずに

　他人の権利を奪ったり
申し立てを曲解して裁いたりすれば
主は決してそれを見過ごしにはされない。

（哀歌 3章22―36節）

ご紹介に預かりました浜矩子でございます。本日はチャペル・アワーで皆さまと共に考える時間を頂戴して、これほどうれしいことはないと思っております。本日のメッセージのタイトルは「慈しみは国境を超えて～グローバル時代をどう共に生きるか～」。この春のチャペル・アワーの統一テーマが「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」。この「主の慈しみは決して絶えない」というところから「慈しみ」という言葉を頂戴してタイトルにしました。私はエコノミストとして、今、我々が生きているグローバル時代をどう生きていけば首尾よく人類はこの時代をいいものとして生き抜いていくことができるのか、グローバル経済は我々にどんな生き方を求めている経済なのかを常日頃、私自身の統一テーマ、基本テーマとしておりますので今回の統一テーマとのかかわりで考えれば、グローバル時代はいとも簡単に人、物、金が国境を超えていくことに最大の特徴があると言われるわけです。ということになれば、国境を超えてどう人類が慈しみあうことができるか、そのことによってグローバル時代を人間にとってまともな時代にしていくことができるかが決まるのではないかと思い、このようなタイトルをつけさせていただきました。

というのが本日のお話の基本的な主旨なのですが、実はこのタイトルにインスピレーションを与えてくれる、同じ旧約聖書の中にもう一つのフレーズがあります。旧約聖書には詩編があります。神をたたえる、天の国をたたえる詩を集めたセクションが詩編というものであると。その中に次のフレーズがあります。「慈しみと誠はめぐりあい、正義と平和は抱きあう」。私はカトリック信者ですが、カトリックの聖歌、典礼聖歌の中によく出てくるフレーズです。これは実に美しい言葉で、さっと聴いた限りでは「そうだな、すばらしい言葉だな」と思うものですが、よくよく考えてみますと、我々が生きている現実の世の中は「慈しみと誠がめぐりあうこと」、そして「正義と平和が抱きあうこと」は実に実に難しいことだな、とふと思いが至った次第です。そう思ってみれば、我々のまさにグローバル時代の現実の中では「慈しみと誠がめぐりあう」というよりは、どちらかというと「慈しみと誠はすれ違い」、そして「正義と平和は抱きあう」どころか「いがみ合う」ことになってしまいがちだというのが現実ではないかという気がしてしまうのであります。自分の誠をしっかりともっている人が、自分とは違う誠をもっている人に対してどれくらい慈しみをもつことができるか。自分とは異なる誠の体系を信じている人に対して、その誠に対してどれくらい慈しみをもってめぐりあうことができるか。非常に難しいことであります。残念ながら、あまりにもタイムリーにバングラディシュで7人の日本人の方が亡くなられた大惨事が起きました。この数日の中の出来事ですが、これを事例として申しあげること自体、憚られるというか身の縮むものですが、あの状況は相異なる誠のぶつかりあい、相異なる誠が慈しみをもってめぐりあえていない姿を、あまりに過酷な残酷な形で示してしまった状況だったとつくづく思えて、ことのほか一段と胸が痛む、やりきれない思いがいたします。あの状況もまた、正義と平和が抱きあうことがいかに難しいかを示しているかと思います。ある人の正義とある人の正義がめぐりあう、そこに沸き上がってくるのが平和であればすばらしいですが、多くの場合、強く心から信じられてい

る正義と同じように、強く、同じように心から信じられている正義が出会った時、そこに現出してくるのが実は平和ではなく、戦争であることが、本当に今、しばしば起こるわけです。今回の悲惨な事件とかかわりがある、長きにわたって続いてきたパレスチナ紛争。イスラエルという国とパレスチナ人たちとの紛争はまさに「正義と平和が抱きあうこと」がどれほど難しいことであるかを我々に鮮烈な形で示してくれていると思うわけであります。

いかにして「正義と正義が平和の中で抱きあう」ことができるのか、そこを厳しく我々に問いかけられているのがグローバル時代であるなとつくづく思います。まさに人々がこれだけ国境を超えて移動していく。人、物、金がここまで簡単に国境を超えて移動し、出会うことがなければ、相異なる誠同士が対峙する、相異なる正義同士が生々しい形で出会うこともない。そういう状況において我々はどれくらい「めぐりあい」と「抱きあい」をつくり出すことができるのか。「すれ違い」と「いがみ合い」ではなく「めぐりあい」と「抱きあい」をどこまでつくり出していくことができるかを、これほど厳しく問われた時代はないだろうと思うところでありまして、「慈しみは決して絶えない」というこの言葉、「憐れみは決して尽きない」という言葉を今ほど重く受けとめるべき時はないということをつくづく感じる次第でございます。

「慈しみと誠がめぐりあうこと、正義と平和が抱きあうこと」は難しいなと思います。今の日本の政治状況に対して本当に激しい怒りが燃え上がりこそすれ、慈しみをもってみるべきものがあるのかと強く感じたりいたします。激しい怒りの中で日々を過ごしている感じです。私の怒りの対象、焦点に誰がいるか、何があるかはあえて申しあげなくてもお分かりいただけると思いますし、ここでそういう名指し、個人攻撃をするとバチがあたりそうな気がいたします。でも神さまの慈しみは絶えないのでございます。お赦しくださるかと思いますが、あえて申しませんが、そういう日々でございます。がゆえにつくづく思うのは「私はあの人の正義を許すことができるか、あの人の誠に慈しみをもつことができるのか」と、非常に考えます。難しいことだなと思います。しかしながら忘れてはいけないことは、いかに気に食わない、いかに許しがたい相手であっても、その人のために祈ることはできなければいけないだろうなと思います。その人の命が危険にさらされている時には救いの手を差し延べなくてはいけないだろうと思っております。その人が痛んでいる、苦しんでいる時には「ザマアミロ」と決して思ってはいけないのであり、慈しみをもって手を差し延べなければいけないのだなと。果たしてそういう場面が到来した時、できるだろうかということを自分もまた問われているなと思う日々でございます。そのあたりが本当の試金石なのだろうなと思います。

いみじくも、そういう時に思い出しますのが、多くの方がご承知のヴォルテールという思想家のことです。啓蒙思想の創始者の位置づけになっている哲学者、思想家です。ヴォルテールの生き方、心情について彼の自伝を書いた人が語っていまして、ヴォルテール本人の言葉だと言われていますが、正確にはそうではなく「ヴォルテールの生き方はこういうものだった」と彼の伝記作家が言っています。それは次の言葉です。ヴォルテールの生き方とはすなわち、「私はあなたの考えていることのすべてに対して全面的に反対である。しかしながらそのあなたの意見を、あなたが人前でしっかり語ることのできる権利が、そのあなたの権利が守られるためには私は喜んで命を捨てる」。それがヴォルテールの心意気だったと語られています〔S. G. Tallentyre『The friends of Voltaire』G. P. Putnam's Sons 1907（筆者訳）〕。どんなに気に食わない、どんなに許せないと思う人の言論であっても、言論の自由が守られるためだったら、気に食わない人のために喜んで命を捨てる、という人であったと。まさに「慈しみと誠がめぐりあう、正

義と平和が抱きあう」というのは、そういうことであると捉えることもできるのではないかと思います。

ちなみにアムネスティ・インターナショナルという人権のために闘う団体がありますが、市民団体で世界にも日本にも支部がある、この中にも一員でおいでになる方もあるかと思いますが、アムネスティ・インターナショナルが基本的に寄る辺としている発想もヴォルテール精神と言われています。そのヴォルテール精神が今、本当に必要とされています。ヴォルテールの思いは、まさに旧約聖書の世界に直結しているということを改めて考える次第でございます。

いろいろなものを超えないと慈しみと誠はめぐりあうことはできず、正義と平和は抱きあえない時代に我々は立ち向かっている。だからこそ全力をあげて追求していかなければいけないと思いますが、そこでこのタイトルをめぐって考えさせられることがございました。

「慈しみは国境を超えて～グローバル時代をどう共に生きるか～」というタイトルですが、「慈しみは国境を超えて」と、この形でいきたいと思いますとお願いしましたところ、ちょっとご注意をいただきまして「こういう場合の超えては越えてですが、これでいいでしょうか」と。そこで私はなるほど、と。直そうかなと思ったのですが、ちょっと考えまして、無意識的に「超えて」と使うのはなぜかなと。そこで思ったのは、「越えて」の方は物理的にできることです。これからはどうなるか分かりませんが、いがみ合いが出る中で国境を越えることさえ難民たちに厳しいバリアができているので「越える」方も簡単ではなくなる、恐ろしいことになるかもしれません。しかしながら、鉄条網を切っても物理的に「越える」ことはできる。けれども憎しみを超越する、いがみあう思いを「超えて」いくのは、「越える」よりはるかに難しいなと思いました。そして「超える」ということがグローバル時代を共に生きるために我々に求められていることなのだと改めて思いまして、これは「超える」でいくべきであると結論に達した次第であります。

それを実現するために、「慈しみと誠をめぐりあわせ、正義と平和を抱きあわせる」ために我々に必要な道具は何か。それを我々に可能にしてくれる道具というのはすなわち「涙」なのではないかと思いました。「人のために泣ける目」、たとえ自分が憎らしいと思っている相手にもその人が悲嘆にくれていれば、もらい泣きをしてしまう、人間にはそういう心情があると思います。もらい泣きをすることができる目。それが我々にあれば、慈しみが国境を超越していくこともできるのではないかと。おかげさまで、そんなことも思った次第でございます。

2016年7月6日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録